

名張市史だより

第1号 (平成18年1月1日)

※カラー版が市史編さん室のホームページでご覧になれます
(http://www.city.nabari.mie.jp/contents/bumon/soumu_bu/sisi/index.htm)



(徳地 正さん所蔵)

天保の伊賀国絵図 下図

(6/6 頁に解説があります)

発刊のことば

編さん委員会 会長

清水 潔

名張市の歴史を知ろうとすると、誰もがひもとく『名張市史』は、中貞夫氏が独力で執筆された通史で、昭和四十九年、市制二十周年にあたり刊行されたものでした。以来、約三十年を閲して名張市は、日本の高度経済成長とともに急速に発展し、今日に至っています。

歴史学とその周辺科学も、この三十年余のうちに長足の進展をとげました。とりわけ発掘調査を重ねた考古学の成果は著しいものがありますし、名張を舞台とする黒田荘の研究においても、専門研究者による新たな知見が加えられています。県・市教育委員会、文化財調査委員会等による調査研究や資料収集、民間の各種研究会や読書会等が積み上げた着実な成果も、蓄積されています。また熱心な郷土史愛好家の活動も、見逃すことはできません。

いま求められるのは、これら先学諸賢の成果の「総合化と体系化」であり、なお未着手の資料の収集調査、さらに既出資料の整理再検討でしょう。その困難な作業が、いま名張市史編さん室を中心に進められつつあります。これの完成には、何よりも多くの方々の御支援と御協力が必要ですが、編さん室の活動実態は、広く知られていないのが現状です。

本紙は、市民はもとより市内外の関係機関・研究者の御理解と御教示をいただくことを願って、おもに市史編さん室の活動の紹介や調査研究の成果を発表する場として、新たに発刊することとなりました。名張の歴史を明らかにする上で、本紙が新たな情報提供や学問的論議の舞台ともなって、有益な小誌として発展することを祈念して止みません。

上三谷の頭上運搬

編集専門部会委員（民俗部会）

吉川 雅章

稲刈が終わり柿も色づいてきた十月から十一月にかけて市内各地で楽しい秋祭りが行われます。そのうち上三谷を紹介してみましよう。

上三谷は名張市の西に位置する戸数十四軒の小さな集落で氏神の白山神社において十一月三日に秋祭りが行われます。獅子神楽もありましたが、若者が少なくなっただ四十五年程前に途絶えてしまいました。

祭りは本当（ほんと）と相当（あいと）の二軒の当屋が中心に準備します。まず十一月一日、本当の家で餅撒きをします。一斗四升分のうち六升分で一〇〇〜一三〇個の“膳の餅”と呼ぶ子餅を、八升分で“のし餅”を作ります。のし餅とは直径が約五〇センチメートル・厚さ一センチメートル大の平らな丸餅で計七枚作っておきます。

二日は宵宮で宮司により祭典が行われます。三日は本祭で朝八時に村人が本当の家に集まります。楽しく雑談していると一枚ののし餅を出席した軒数分に切り分けて出席賃として配られます。一方、

本当と相当の奥さんは台所で里芋・大豆・蒟蒻を各々煮たあと、大豆は磨り潰します。これをくるびといいます。出来ると男性陣が神饌の調整に取りかかりますが、手順を箇条書きにしてみます。

①直径約六〇センチメートルの飯切を神饌台に用い、その中に八枚の小土器を円形に並べる

②小土器に刻んだ蒟蒻煮・里芋煮・蒟蒻のくるび和え・里芋のくるび和えの四種の調理した神饌と生の柘榴・栗・小豆・柿の四種の計八種を盛る

③数本の新藁で作った大きな輪を飯切の内側に置く

- ④のし餅一枚を中央から台の縁にかかるとして神饌をかぶせる
- ⑤もう一枚ののし餅を中央から④と反対側の台の縁にかかるとしてかぶせる
- ⑥④と⑤でかぶせた餅の中央にもう一枚のし餅をかぶせる
- ⑦その上に里芋の葉を一枚置く
- ⑧葉の中央に蒟蒻と里芋のくるび和えを少し乗せる
- この神饌を二台分調整します。膳の餅は二つの畚（ふご）に入れます。



飯切に盛られた神饌

神饌を調整し終わると畚と二台神饌の計三人の担ぎ手を先頭に村人たちは神社までお渡りしますが、これがユニーク。何と二人の神饌台の担ぎ手は各々頭上に乗せて運搬するのです。



神饌を頭に乗せて神社までお渡しする氏子

神社に着くと拝殿に米・酒・魚・野菜などの一般の神饌と共に神前に供えます。本祭には宮司に代わって区長が祭主を勤めて修祓を行い、氏子総代・当屋が玉串を奉奠（ほうてん）して祭りを終えます。このあと参集所で座拝となります。

が、座には塗りの膳に取り皿・盃・湯飲み茶碗、膳の横に焼魚が並べられています。さらにお供えされていた蒟蒻と里芋のくるび和えも取り皿に分けられます。御神酒をくみ交わしながらお供えた今年



の収穫物を氏神の前で肴としていただく“神人共食”が今も生き続いています。十二時頃まで宴がりひろげなれたあと紙撚りを使って来年の当屋を決め、最後に膳の餅やのし餅を分けて祭りは終了します。



直会のあと、紙撚りで当屋を決めるところ

神饌を頭上運搬する祭りは市内では上三谷だけですが、全国的にみても珍しいものです。一例を挙げると滋賀県野州市の若宮神社春祭りではやはり飯切に神饌を調整した台を当屋から神社まで頭上で運びます。大津市の樹下神社では晴れ着姿の未婚女性が四角い神饌台を頭上で運びます。また奈良県桜井市の八坂神社では飯切に神饌を調整した台を両手でかかえながら渡御しますが、以前は上三谷同様、頭上運搬していたのではないのでしょうか。いずれにしても神饌の頭上運搬は今日では非常に珍しい運び方に間違いありません。

ソイルマーク ～遺跡のみちしるべ～

編集専門部会委員（考古部会）

門田了三

ソイルマークってご存じですか。地中の生活痕跡（溝や住居跡など）が、地表から土の色の違いで観察できることで、雨上がりの水田や畑で見える場合があります。

溝あるいは柱穴、地面を掘り窪めた竪穴住居などの当時の地面（生活面）を形づくる土質と、それを覆う表土の土質の体積が大きく違う場合、含水率の差により色が違って見えます。古くは、埼玉県北部の埼玉（さきたま）古墳群の航空写真に、削平された古墳の周溝や道の側溝などが黒く筋となつて写っています。また、古代官道の側溝が同じく黒い筋となつて観察できることが、各地の航空写真で観察されています。

隠駅家（なばりのうまや）推定地として発掘調査を実施した黒石遺跡では、表土の耕作土を除去したあと、台風により現場が水没し

てしまいました。ポンプで排水後、夏空のもとでの乾燥中、溝や柱穴、竪穴住居などが早く乾燥し、白くなつて我々の目に飛び込んできました。堅く締まつた当時の地面と、溝や柱穴を埋める軟らかい土との土質の違いから、埋め土の方が早く乾燥したということです。調査の結果は、色の違いのとおり飛鳥時代・天武朝の溝や高床倉庫の柱が見つかり、駅家を経済的に支える集落の一端を垣間見ることができました。

また、ソイルマークではありませんが、山の斜面に造られた竪穴住居などでは、埋まりきらずに窪地となつて地表面に現れている遺跡もあります。北海道では竪穴住居が深く掘られているため、函館空港遺跡のように窪地の下はすべて竪穴住居という遺跡もありました。名張でも、青蓮寺の白早稲（し

らわせ）遺跡（現在百合が丘住宅地）では、古墳時代前期の竪穴住居が、窪地となつて地表面に現れていました。「まるで、北海道みたいやな」という声も挙がるぐらい、関西では非常に珍しい遺跡でした。麓の箕曲神社裏山の魚ノ尾遺跡でも、山腹の所々に窪地が見られ、古墳時代前期の土器が採集されています。たぶん、竪穴住居が埋まっていることでしょう。



黒石遺跡（瀬古口）：白く見えるのが溝と柱穴と竪穴住居

市史編さん室より

現在、『名張市史』の刊行に向けて事業を進めておりますが、その構成及び計画は次のとおり予定しています。

【資料編 七巻】

・考古 平成20年

・民俗 平成21年

・古代 平成22年

・中世 平成23年

・自然

・近世

・近・現代

※文化財は、各編で取り扱う。

【通史編 三巻】

・原始・古代・中世

・近世

・近現代

【年表・索引編 一卷】

・年表・索引

以上、全十一巻

編さんを行っている委員会と委員を紹介します。

【編さん委員会】

市史編さんの基本方針に関する
こと、市史の刊行計画に関する
こと、その他必要な事項に
関する等、その具体的な意思を決定する。

明永 恭典

(名張市文化財調査会会長)

酒井 一

(監修者・三重大学名誉教授)

櫻井 治男

(皇學館大学社会福祉学部長)

清水 潔

(会長・皇學館大学文学部教授)

高倉 一紀

(皇學館大学文学部教授)

夏秋 幹

(元 三重テレビ放送社長)

西垣 貞子

(古代史ロマン夏見会等会員)

松鹿 昭二

(副会長・名張市教育委員)

松本 豊明 (名張市助役)

山下 員啓 (名張市総務部長)

【編集専門委員会】

市史の編集に関する専門事項の
調査審議、市史各編の編集を実施
する。

綾村 宏

(奈良文化財研究所・文化遺産
研究部長兼歴史研究室長)

酒井 一

櫻井 治男

清水 潔

武知 京三

(近畿大学経済学部長)

水口 昌也

(伊賀市立島ヶ原中学校長)

山田 純

(三重大学名誉教授)

【編集専門部会】

市史各編の編集及び刊行業務の
推進 (発刊に向けての検討、資料
収集・分類・整理、調査、執筆等)
を図る。現在、考古、古代、中世、
民俗の四部会が活動中。

【考古部会】

水口 昌也

門田 了三

(市教育委員会文化振興室主幹)

新名 強

(三重県埋蔵文化財センター技師)

【古代部会】

清水 潔

荊木 美行

(皇學館大学史料編纂所教授)

【中世部会】

綾村 宏

馬田 綾子

(梅花女子大学教授)

【民俗部会】

櫻井 治男

齋藤 平

(皇學館大学文学部助教授)

吉川 雅章

(日本民俗学会会員)

資料調査のお願い

歴史資料を探しています。古文
書や明治・大正・昭和の記録、写
真、古い本などをお持ちの方は市
史編さん室までお知らせください。

『おきつもの名張 今と昔』
定価八百円にて好評発売中

市制五十周年を記念して刊行し
た、名張の一万二千年を自然・歴
史・暮らしで学ぶガイドブック。確
かな資料でまとめた内容を八十五
項目の読み切りで楽しめる手軽な
一冊にしました。

規格は、B5判、縦型、一部カ
ラー、二〇九頁です。

市史編さん室事務所 (丸之内五
四番地の八 旧老人福祉センタ
ー内) でのみ販売しています。



新史料 天保の伊賀国絵図下図

監修者 酒井 一

昨年九月、市史編さん室に市内南町の徳地正さんから、一九七cm×一八〇cm四方の大きな伊賀四郡全域にわたる絵図が届けられました。徳地家は南出組の大庄屋の家筋です。近年いちじるしく進展している近世国絵図研究の空白を埋める貴重な新史料です。

徳川幕府は、支配体制の整備、展開にともない、慶長九年（一六〇四）、正保元年（一六四四）、元禄九年（一六九六）と天保六年（一八三五）の四回にわたって国絵図の作製を諸大名に命じ、一村ごとに全国の郷村を書き上げた郷帳の作製と併行して進められました。慶長期については不明の点が多いのですが、今回明らかになったのは、津藩主藤堂和泉守高猷（たかゆき）から幕府勘定所に提出された天保の伊賀国絵図下図の控です。

全国の郷帳が天保五年十二月に完成し、翌六年十二月、幕府は久しぶりに国絵図の改訂を諸大名に命じ、

約一四〇年前の元禄国絵図の写を切図にして配布しました。往還、海岸通り、川筋、その他新田村々に至るまで現状に即して調査し、変更箇所を懸紙（かけがみ）をつけて描くように指示しました。

徳地本伊賀国絵図では五か所に修正内容を記した懸紙がつけられ、その一方の端を元禄国絵図上に貼りつけています。例えば名張市域についてみると、安部田、丈六、長屋の上に横長の懸紙が地形に沿って貼りつけられています。元禄図では宇陀川の左岸を通っていた大和長瀬越（室生村）への道が、右岸に変更されています。新田・小波田付近の変更も懸紙に書かれています。

このようにして全国から提出された下図を幕府勘定方のもとで一括整理し加筆修正の上、国絵図は完成されました。この時に整備された国絵図（いま幕府本とよぶ）と郷帳はすべて国立公文書館内閣文庫に揃っています。

徳地本と幕府本を対比すると、絵図の端に示された「伊賀国高井郡色分目録」では、村数はともに二〇八か村で一致しますが、幕府本では郡

高（阿拝・山田・伊賀・名張）はそれぞれに増え、国高は徳地本の十万五四〇石二斗に対し幕府本は十一万九六石五斗三升六合となっています。さらに天保郷帳の記事と比較すると、郡高・国高は幕府本と同じですが、村数は一八二か村とあります。要するに三者それぞれに異同があることがわかります。このことは国絵図の作製行程を示しています。

改訂国絵図の作製を命じられた時点で、すでに天保郷帳は完成していましたが、元禄図を元にして新たに修正を加えたものの、郡高・国高は元禄郷帳のままとし、一方村数は天保郷帳によったとみられます。したがって郡高・国高および懸紙による絵図修正は、藤堂家から提出された下図をもとに新規に幕府勘定所が整備したといえます。下図はそのまま正式の幕府本とはならなかったのです。下図は、今でも大名の手元に残ることが確認されていましたが、伊賀国の場合はどういうわけか控が大庄屋の元に伝わることになりました。

伊賀国絵図は、正保図（元禄期の写、三重県所蔵）、元禄図（三重県立図書館、伊賀市立上野図書館）とい

ま問題の天保図（国立公文書館）が現存しています。一般に国絵図の縮尺は一里六寸（二万二六〇〇万分之一）であるのに、伊賀は小国ゆえ一里九寸（二万四四〇〇万分之一）で、一里〓約二十七センチに書かれています。

藤堂高猷が提出した天保国絵図下書には作製年代を欠きますが、幕府本には天保九年五月と明記し、勘定奉行明楽（あけら）飛騨守、勘定所目付田口五郎左衛門、勘定吟味役大沢主馬の名があります。いま述べたことのほか、徳地本には現存の元禄国絵図や郷帳で不明であった元禄期の村高が下図原本に記されており、また村名・村高・道路などの変更を描き、明治維新前三十年の伊賀全国の情報をさまざまに伝えて興味深く、史料価値の高いものです。

編集発行

名張市総務部市史編さん室

〒五一八〇七二八

名張市丸之内五四番地の八

電話〇五九五（六四）二二四九

<http://www.city.nabari.mie.jp/contents/bumon/sounbu/bu/sisi/index.htm>